

**可愛い花屋店員のパンプス足で無残
に踏み散らされる花たちと、蒸れた
足の匂いの誘惑**

私の足
匂いしますか？

はい…



第1章 目の前で踏まれた花びら達

夕日が街の端をゆっくりと金色に染めていく
17時過ぎ。

高橋優斗（30）は、いつものようにスーツの襟元を少し緩め、鞆を下げて歩道を歩いていた。

外回りの営業を終えた後の、この時間帯がいちばん落ち着く。

頭の中で今日の仕事の事を思い出しながら、体は自然と決まったルートを辿る。

住宅街の角を曲がり、小さな商店街の入口に差し掛かると、いつも通り、淡いピンクののれんが風に揺れているある店が見えてきた。

「花の小道」

こじんまりとしているが、おしゃれな小さな花屋。

優斗は毎日この前を通る。

特別な用事があるわけではない。

ただ、前を通るといつも店先に立っているある女性の姿をどうしても目で追ってしまうのだった。

桜井由実（25）

黒寄りの茶髪を柔らかくウェーブさせ、大きな瞳で客に微笑む花屋の店員らしい優しい雰囲気、可愛らしい女性。

今日も淡い色のブラウスに黒のエプロンを締め、デニムの裾を軽くたくし上げている。



足元は遠目からだと素足と錯覚するほどの薄いストッキングに、いつもと同じ赤いペタンコパンプス。

ヒールは二センチほどしかなく、歩くたびにぺたぺたと控えめな音を立てる。

優斗は、歩道の端でほんの少し足を緩めた。

(……今日もかわいいな…)

店先の作業台に向かい、由実は切り花の茎を揃えていた。指先が器用に動く。

時折、顔を上げて通りかかる人に軽く会釈する。その笑顔は、花屋という仕事にぴったり

な、柔らかくて無防備なものだった。

優斗は、その笑顔を横目で捉えながらも、視線が自然と下に落ちていくのを止められなかった。

彼女の足元。

作業台の下には、剪定の際に落ちた花びらや細い茎が、散らばっていた。

白いカスミソウの欠片、薄いピンクのバラの花びら、緑の茎の切れ端。

風に舞うには重すぎて、アスファルトに張り付くように沈んでいる。

由実は、それらを特に気にも留めない様子で、作業を続けていた。

そして――。

彼女の右足が、何気なく動いた。

赤いパンプスを履いた足が、白い花びらの上にそっと被さる。

クシャツ…。

花びらが踏み潰される小さな細かい音が、かすかに聞こえる。

(あっ……)

優斗の足が、止まった。

由実の顔は、相変わらず穏やかなままだった。唇の端がわずかに上がり、作業中の花を眺めながら、軽い独り言をこぼしている。

「……今日は少し水、多めにしようかな〜。」

その声は、聞こえるか聞こえないか分からない程度の独り言。

その足元では、容赦なく花びらが潰されていた。

可愛いパンプスのソールが花びらを押し潰し、白い繊維が湿った跡を残して地面に張り付く。

由実は気づいていない。

あるいは、気づいていても気にしていない。

彼女はただ、作業を続けるために、自然に足を動かしているだけだ。

もう一度、左足が動いた。

パキュッ…。

今度は、剪定で切られた立派な緑の茎がパンプスの下に潜り込んだ。

由実は軽く踵を浮かせ、踏み直すように体重を乗せた。

茎が折れる感触が、ソール越しに伝わっているはずなのに、彼女の表情は変わらない。

(……やばい……)

優斗の喉が、小さく鳴った。

視界の端で、由実の踏み潰された茎と花びらから、わずかに汁が滲んでいるのが見えた。

透明に近い、薄い液体が、由実の足元の地面に染みている。

由実はそれを見下ろすことすらせず、作業台の上の花を丁寧に整え続けている。

可愛い顔。

優しい声。

そして、その足元で、綺麗な花たちが無自覚

に踏み潰されていく。

優斗の胸の奥で、何かが、ゆっくりと、しかし確実に崩れていった。

(……こんなに、優しそうで可愛い人が…
…)

(足元では、あんなに風に花を……)

由実のポンプスのソールが、もう一度、散らばった花びらの上を滑るように被さる。

ソールの表面には、すでに白い花びらの残骸が何枚か張り付いていた。

湿った繊維が、靴底に吸い付くように密着している。

由実は、それを払おうともせず、ただ自然に足を運び、次の花に手を伸ばす。

踏まれた花びらは、完全に形を失い、汁を滲ませたままアスファルトにへばりついていた。

優斗は、自分が息を止めていることに気づいた。

眼鏡の奥の視界が、熱を帯びて少し霞む。

スーツのズボンの内側では優斗のペニスが明らかに硬さを増していた。

理性が「見るな」と警告を発しているのに、視線は離れることを拒む。

由実の足元だけが、世界の中心のように鮮明

に浮かび上がっていた。

(……やばい)

(こんなの、見てるだけで……)

由実が、作業台を少し横にずらし、落ちた花びらを避けようともせずに足を踏み出した。

クシャッと踏まれてソールに貼りつく花びら。

音は小さく、しかし優斗の鼓膜には、異常に大きく響いた。

パンプスの靴底が花びらを完全に押し潰し、汁がさらに滲む。

由実は、その感触を靴底で感じているはずなのに、顔は相変わらず穏やかな笑みを浮かべている。

「ふふっ、今日は綺麗に咲いてるね〜……」

独り言のように呟きながら、彼女は花を一輪、丁寧に水に挿した。

その仕草の美しさと、足元の無慈悲さが、優斗の中で激しくぶつかり合う。

可愛らしい笑顔の向こう側で、彼女の足は、何の迷いもなく、綺麗な花を踏み潰している。

それは、悪意ではない。むしろ、悪意がないことが、たまらなく残酷で、たまらなくエロティックだった。

優斗は、自分の手が鞆の取っ手を強く握りしめていることに気づいた。

指の腹に、汗がじわりと滲んでいる。股間の疼きは、もう抑えきれないほどはつきりとした熱を帯びていた。

(……俺は、今、何を見てるんだ)

(こんなに可愛い人が、無意識に……花を、踏み潰してる…)

(しかも、何も気にせずに……)

由実が、軽く踵を上げ、ソールに張り付いた花びらの残骸を、アスファルトにこすりつけるようにして落とした。

白い繊維が地面に残り、パンプスの底には、湿った跡がくっきりと残っている。

彼女はそれを一瞥することすらなく、次の作業に移った。

優斗の理性が、完全に音を立てて軋んだ。

その瞬間、彼の中で何かが、決定的に目覚めてしまった。

ただの「可愛い花屋の店員」では、もうなかった。

赤いペタンコパンプスの下で、無自覚に花を踏み潰す、あの足。

あの笑顔のまま、容赦なく何かを潰してしまう、あの無意識の残酷さ。

優斗は、自分の体が熱を持っているのを感じながら、ようやく視線を引き上げた。

由実は相変わらず、店先で花を整えている。通りすがりの客に軽く会釈し、柔らかい声で「こんにちは～」と声をかける。

その仕草は、どこまでも日常的で、どこまでも無害だった。

だが、優斗の目には、もう別のものが焼き付いてしまっていた。

潰された花びらの残骸。

ソールに張り付いた白い繊維。

汁が滲んだ、靴底。

そして、それを何とも思わずに微笑む、彼女

の横顔。

優斗は、深く息を吸い込み、ゆっくりと歩き出した。

足取りは普段より少し重い。

鞆の中で、書類が軽くぶつかる音がする。

(……やばすぎる…)

鼓動が早い。

自らの心臓の響きと一緒に、赤いパンプスの下で潰されていく花びら達の光景が、何度も何度も蘇ってくる。

営業帰りの、ありふれた夕暮れ。

その日常の中で、優斗の中の何かが、静か

に、しかし取り返しのつかないほど目覚めてしまったのだった。

* * *

帰宅し、家のドアを閉めた瞬間、優斗は壁に背中を預けたまま、長く息を吐き出した。

鞆を床に置き、眼鏡を外す。視界が少しぼやけると、かえって先ほどの光景が、より鮮明に蘇ってきた。

赤いペタンコパンプスを履いた彼女の足。

クシャッ、という小さな音。

白い花びらが、ソールの下で汁を滲ませながら潰れていく様子。

そして、それを何ひとつ気に留めず、穏やかに微笑んでいる彼女の横顔。

(……だめだ)

(頭から、離れない)

リビングの明かりもつけず、優斗はソファに沈み込んだ。スーツのままでは熱い。

ネクタイを緩め、シャツのボタンを一つ外す。指先が、反射的に別の場所へ滑り始めていた。

ズボンのチャックを下ろす音が、静かな部屋に小さく響く。

すでにカチカチに硬くなっているものを、掌で包んだ瞬間、優斗は低く息を詰めた。

目を閉じる。

すぐに、彼女の姿が浮かんだ。
作業台の前で、淡いブラウスに黒のエプロン。

柔らかくウェーブした茶髪が、夕方の光を受けて揺れている。

大きな瞳が細くなり、唇の端が上がる——あの、いかにも花屋らしい優しい笑顔。

その足元で、赤いパンプスを履いた足が動く。

彼女のパンプス足が花びらの上に乗る。

(……っ！)

優斗の手が、ゆっくりと動き始めた。

彼女の顔は、相変わらず穏やかだ。

足元では容赦なく花びらが潰されていく。

ソールに白い残骸が張り付き、湿った繊維が赤い革に吸い付くように密着している。

(あんな可愛いのに……)

(あんなに無意識に……)

優斗の想像が、さらに膨らむ。

一日中花屋での立ち仕事。

水やりや植物の移動で歩き回り、あんな可愛い顔の女性でもきっと靴の中はさぞ蒸れているに違いない。

(……どんな匂い、するんだろう……あんな可愛くても、やっぱり……)

優斗の手が、速くなる。

彼女が軽く踵を浮かせ、ソールに張り付いた花びらをアスファルトにこすりつける仕草を思い出す。

白い繊維が地面に残り、靴底には湿った跡がくっきりと残る。彼女は一瞥すらせず、次の花

に手を伸ばす。

その無自覚さと足元の残酷さが、たまらなかった。

(俺が、見てるってことも知らないで……)

(笑顔のまま、踏んでた……今日一日中仕事で夕方まで履いたパンプスで……)

腰が、小さく跳ねた。

彼女が仕事から帰り、玄関で脱いだばかりのパンプスに顔を近づけて匂いを嗅いでいる自分を想像する。

一日中立ち仕事で熱を持ったパンプスの内部。

中敷きには指の形に残った染み。
つま先の方から立ち上る、酸っぱくて濃厚な
匂い。

鼻の奥を刺激する発酵臭と、わずかな花の甘
さ…。

頭がくらくらするような生々しさ。

(……嗅いでみたい……)

(彼女の履いてたパンプスの匂いを、直接…
…)

手が、激しく動く。

由実の笑顔と、潰された花びらの残骸、想像
上のパンプスの中の匂いが、優斗の意識の中
でぐちゃぐちゃに混ざり合っていく。

理性が「おかしい」と叫んでいるのに、体はもう止まらない。

「……うっ！……」

小さく息を漏らしながら、優斗は果てた。

熱いものが、掌を伝って溢れ出す。

腰が何度も痙攣し、息が荒くなる。

目の裏に、赤いソールと白い花びらが焼き付いたまま消えない。

しばらく、動けなかった。

汗でシャツが背中に張り付いている。眼鏡を外したままの視界が、少し霞んでいる。

射精の余韻がゆっくりと引いていく中で、優斗の胸に、冷たい自己嫌悪がじわりと広がってきた。

(……俺、こんなことで……)

(通りすがりの花屋の足元を見て、花を踏む姿を思い出しながら抜いてる……)

(俺は、何をやってるんだ……)

それでも、手が震えながらも、もう一度彼女の足元を思い浮かべてしまう自分がいた。

* * *

その日から、優斗の帰り道は、明確に変わった。

「たまたま」通るのではなく、意識して「花の小道」の前を通るようになった。

営業の予定を少し調整し、夕方の時間帯に店の前を通過するルートを選ぶ。

遠くからでも、彼女が目立つ赤いパンプスが目に入ると、胸の奥がきゅっと締まる。

由実が店先にいる日は、できるだけ自然に振る舞いながら、足元を観察した。

パンプスは、毎日履き込まれているせいか、以前よりわずかに使用感が増しているように見えた。

つま先の部分に薄い擦り傷。

ヒールの接地面が少しすり減っている。

そして、何より——ソールに、時折、白い花びらの欠片や緑の茎の断片が張り付いているのがわかった。

由実は、それを気にせずに歩いている。

作業中に足を動かせば、地面に落ちた花びらをまた踏む。

クシャッ、という小さな音が、優斗の耳にだけ異常に大きく聞こえる日もあった。

彼女の顔は常に穏やかで、客に笑顔を向け、花を丁寧に扱っている。

そのギャップが、見るたびに優斗の理性を削り取っていく。

由実が店の奥に引っ込んでいる時間や、少し離れた場所で作業しているときも、優斗は足を止めずにはいられなかった。

店先のアスファルトに、明らかに踏まれた跡が残っているからだ。

白い花びらが、ぺちゃんこに潰されて地面に張り付いている。

茎が折れて、汁の染みが広がっている。

ソールの模様が、薄く転写されたような跡もあった。

彼女がさっきまでここにいて、無意識にそれらを踏み潰していった痕跡。

(……彼女が、踏んだんだろうな……)

(この花びらも、茎も……全部、あの足で)

優斗は、遠目にそれを見つめながら、自分の中で熱が再燃するのを感じていた。

股間が疼き、呼吸が浅くなる。

同時に、「こんなものを見て興奮している自分」への嫌悪が、冷たく胸を刺す。

(おかしいのは、わかってる)

(でも……止められない)

帰宅すれば、また同じことを繰り返す。

由実の笑顔と、赤いパンプスの下で潰されていく花びらと、想像上の彼女の足の匂いを重ねて、何度も果てる。

射精のたびに自己嫌悪が強くなるのに、次の日もまた、店の前を通ってしまう。

履き込まれたパンプスの使用感が増すたびに、優斗の執着は深く、重く、なっていた。

ある夕方、由実が店先で花を運びながら、軽く足を踏み外したように見えた瞬間があった。

赤いつま先が、地面に落ちていた小さな茎を踏み、パキッと苦しそうな音を立てる。

由実は「あっ」と小さく声を上げただけで、すぐに笑顔に戻って作業を続けた。

優斗は、その場で立ち尽くした。

(……もう、だめだ)

(あの足から、離れられない)

眼鏡の奥で、視界が熱を帯びる。

胸の奥で、何かが完全に固定されていく感触があった。

ただの興味や、一時的な興奮ではない。

彼女の足元——あの赤いペタンコパンプス

と、その中に隠れている足と、無自覚に何かを踏み潰してしまう仕草そのものが、優斗の欲望の中心に、深く、根を張ってしまったのだ。

家に帰れば、また思い出しながら果てる。

明日も、店の前を通る。

その繰り返しの中で、優斗は自分が、ゆっくりと、しかし確実に、彼女の足の虜になっていくのを自覚していた。

第2章 もっと近くで…

雨が、街を灰色に溶かしていた。

優斗は傘を差しながら、いつもの帰り道を歩いていた。

靴音が濡れたアスファルトに沈む。

胸の奥では、ここ数日で急速に膨れ上がった欲求が、雨音に紛れて脈打っていた。

(……もう、遠目で見ただけじゃ足りない)

由実の足元を、もっと近くで見たい。

赤いペタンコパンプスのソールに、どんな残骸が張り付いているのか。

履き込まれた革の質感や、微妙な歪みまで、直接目に焼き付けたい。

その衝動が、理性の壁をじわじわと押し広げ

ていた。

今日こそ、店に入ろう。

決意は、雨の冷たさでかえって硬くなっていた。

「花の小道」ののれんが、雨に打たれて重く垂れている。

店先のタイルは水を含み、薄く光っていた。

優斗は傘を畳み、入り口の前で一瞬だけ息を整えた。

そして、足を踏み入れる。

チャイムが、小さく鳴った。

店内は湿った空気と、切り花の甘い匂いが混じっている。

由実は奥の作業台で、雨に濡れた鉢を丁寧に拭いていた。

黒いエプロンの裾が、わずかに揺れる。

「いらっしやいませ～」

柔らかな声がした。

優斗は軽く会釈を返し、視線を花に向けたふりをしながら、ゆっくりと店内を歩き始めた。

キョロキョロと店内を見渡す。

ふと上の方に目をやると、レジの奥の方に額縁に入った顔写真と共に、なにやら花に関する資格のような一覧が書かれたものが壁に貼られていた。

そこには笑顔の由実の顔と、羅列された保有資格らしき文字と共に小さく桜井 由実と記載されていた。

（名前、由実さんっていうんだ……）

心臓が、鼓膜の裏で大きく鳴っている。

その時、花を抱えた由実が優斗の前を横切った。

ぺた、ぺた。

濡れた赤いパンプスが、床の上で小さな音を立てる。

優斗の視線が、自然と下がった。

そして——息が、止まった。

彼女の去り際に足元へ目をやると、雨で湿ったソールが、はっきりと見えた。

黒い靴底に、白い花びらの残骸がびっしりと張り付いている。

カスミソウの細い花卉、薄いピンクのコスモ

スのような欠片、緑の茎の断片。

雨の水分を吸って、それらは生々しく、ぺったりとソールに密着していた。

歩くたびに、花びらがさらに潰され、汁が薄く広がっているのがわかる。

(……っ！)

優斗の股間が、即座に熱を持った。

雨に濡れた靴底。無自覚に踏み潰された花びらたちが、びっしりと貼り付いている。

由実はそれを気にも留めず、普通に歩いている。可愛い顔で、ほかの客に微笑みながら。

「少々お待ちくださいね」

由実が作業台に花を置き、こちらを向いた。

間近で見る彼女の顔は、遠目で見ていたときより、ずっと可愛かった。

大きな瞳が、雨の日の薄暗さの中で少し潤んで見える。

黒寄りの茶髪が、湿気でわずかにうねっている。

唇が動いて、穏やかな笑みを作る。

その足元では、赤いパンプスのソールが、花びらの残骸を貼り付けたまま、静かに床についている。

(……近い)

(こんなに近くに、あの足が……)

優斗は、花の値札を見るふりをしながら、何度も視線を足元に落とした。

履き込まれたパンプスのつま先は、わずかに型が崩れ始めている。

ヒールの接地面は黒ずみ、雨で濡れた革が、薄い光を反射していた。

ソールに張り付いた花びらは、歩くたびに少しずつ位置を変え、新たな汁を滲ませている。

(あんなに汚れた靴底を、隠しもせずに…)

理性が悲鳴を上げる。ズボンの生地が、膨らんだものを抑えきれずに突っ張っている。

優斗は鞆を体の前に抱え、姿勢を少し崩してそれを隠した。

由実が、ふと彼の方を見た。

「……あの、いつもお店の前を通られている方ですよね？」

予想していなかった声だった。

優斗の肩が、わずかに揺れる。

「えっ……あ、はい」

声が、少し上ずった。

由実は困ったように、でも明るく微笑んだ。

「雨の日なのに来てくださって、ありがとうございます。最近、よくお見掛けするなって思ってたんです。営業さん、ですか？」

「はい。近くを回ることが多くて……」

「そうなんですね。お花、ご覧になりますか？　今日は雨で少し元気のない子もいるんですけど」

会話は、ごく普通の世間話だった。

由実は自然に話し、優斗も何とか平静を装って返事をする。

花の話、雨の話、近所の話。

短いやり取りの中で、由実は優斗を「話しやすい誠実そうな人」だと感じたようだった。

警戒する様子もなく、むしろ少し嬉しそうに目を細めている。

優斗は、彼女の言葉を聞きながらも、意識の半分を常に足元に割いていた。

赤いパンプスを履いた足が、話の合間に小さく動く。

ソールの花びらが、床に微かに擦れる音。

雨に濡れた革の匂いが、花の香りに混じって、かすかに鼻をくすぐる気がする。

(…彼女と…自然に話せてる……)

距離が、一気に縮まった感覚があった。

これまで一方的に見つめていただけの存在が、今、目の前で自分に微笑み、声をかけてくれている。

その喜びと、靴底に張り付いた花びらの生々しさが、優斗の中で激しく混ざり合っていた。

「また、よかったら寄ってくださいね」

由実が、別れ際にそう言った。

「はい……ありがとうございます」

優斗は深く頭を下げ、店を出た。

雨が、顔に冷たく当たる。傘を開いても、体の内側は熱いままだった。

* * *

家に帰ると、優斗は濡れた傘も鞆も放置したまま、ソファに倒れ込んだ。

雨の音が窓を叩いている。

目を閉じると、すぐに今日の光景が蘇る。

初めて間近で見た由実の顔。
潤んだ大きな瞳。柔らかく動く唇。そして、
そのすぐ下で、雨に濡れた赤いパンプスのソールにびっしりと張り付いていた花びらたち。

(……あんなに、近くで)

(靴底が、花びらでぐちゃぐちゃになってた……)

手が、自然とズボンの中へ滑り込む。

すでに硬くなったものを握った瞬間、低い吐息が漏れた。

想像が、次々と重なる。

由実が歩くたびに、ソールの花びらがさらに潰されていく様子。

雨の水分で生々しく光る残骸。

履き込まれたパンプスの、使用感たっぷりの形。

可愛い笑顔のすぐ下で、無自覚に汚れた靴底を晒しているギャップ。

(声、かけてくれた)

(俺のこと、知っててくれた)

その事実が、興奮をさらに煽る。

由実の笑顔と、雨の日の靴底と、「また寄って

くださいね」という声が、頭の中でぐるぐると回る。手が速くなる。腰が浮く。

「……由実、さん……」

今日初めて知った彼女の名前を吐き出しながら、優斗は激しく果てた。

熱いものが、何度も脈打って溢れ出す。

余韻の中で、彼は天井を見つめながら、荒い息を繰り返した。

雨音が、遠くで続いている。

今日、初めて店に入り、初めて声をかけられ、初めてあんなに近くで彼女を見た。

そのすべてが、優斗の執着を、さらに深く、

甘く、食い込ませていった。

もう、引き返せない場所まで来てしまったのだと、彼は薄く自覚していた。

* * *

数日後の午後。

空は晴れ渡り、花の小道ののれんが穏やかに揺れていた。

優斗は、前回の雨の日の余韻を胸に、再び店の前に立った。もう遠目で見るだけでは足りない。

由実と軽く言葉を交わせる距離が、今の彼にとっては何よりの救いであり、同時に危険なものになっていた。

中に入ると、由実は店内の作業台で花の剪定をしていた。

「あ、こんにちは。また来てくださったんですね」

明るい声が飛ぶ。黒いエプロンの下から覗くデニム。

そして足元——今日はストッキングを履いていない。

白い素足が、赤いペタンコパンプスに直接包まれているのがわかった。

つま先の部分に、足指の形がわずかに浮き出ている。

「はい……近くまで来たので」

優斗はそう答えながら、自然な距離を保って彼女の横に立った。

剪定バサミが軽やかに動く音。切り落とした茎や葉が、作業台の下に落ちていく。

「今日はいいいお天気ですね。花も喜んでるみたいです」

由実が微笑みながら言う。優斗も軽く相槌を打ち、世間話を続けた。

前回よりも会話は滑らかだった。

由実も彼を「顔見知りの客」として、特に警

戒なく受け入れているようだった。

優斗の視線は、話を聞きながらも何度も足元へ落ちる。

素足で履かれた赤いパンプス。
履き込まれて形が少し柔らかくなったつま先。

踵の部分が、歩くたびに軽く沈む。

素肌と革が直接触れ合っているせいか、以前より生々しい使用感が漂っていた。

(……今日は素足なんだ……)

(パンプスの中、直に……)

そんなことを思っていると、ふと、黒い小さな影が目に入った。

作業台の足元。アスファルトとタイルの境目あたりを、ゴムムシのような小さな甲虫がうろうろと歩いている。

黒光りする甲羅が、照明の光を受けて鈍く光る。

由実の左足のすぐ近くまで、ゆっくりと近づいていた。

(…あっ……)

優斗の喉が、小さく鳴った。

このままだと——。

由実は笑顔のまま、剪定した花を水に挿しながら話を続けている。

そして、彼女は何気なく左足をずらした。

フラットソールが、黒い甲虫の上に、ゆっくりと覆いかぶさった。

クシャッ……。

小さな、しかし確かに虫が潰された音が、優斗の耳に届いた。

(……っ！)

由実は気づいていない。

左足で虫を踏みしめたまま、優斗の方を見て微笑んでいる。

「お花、好きなんですか？」

話かけてくれている声すら、今の優斗には遠く感じられた。

由実のポンプスのソールの下で、甲虫は完全に潰されている。

優斗の股間が、熱く、硬く、限界まで膨らむ。

ズボンの生地が、疼きを隠しきれずにパンパンに突っ張る。

鞆を前に抱え直すが、熱は収まらない。

(……踏んだ)

(今、由実さんが……笑顔のまま……)

由実は踏みしめた左足を、しばらく動かさなかった。

会話を続けながら、体重を自然に預けている。

赤いパンプスのソールが、黒い残骸を押し潰したまま、平らに地面の上に立っている。

優斗の呼吸が、浅くなった。

視界の端で、由実の素足の甲が、パンプスの縁からわずかに覗いている。

白い肌と赤い革のコントラスト。

そのすぐ下で、命が潰されているという事実が、優斗の理性を容赦なく削り取っていく。

しばらくして、由実が左足を動かした。

すかさず目をやると、そこには、ぺちゃんこの平面になったゴミムシが、体液を滲ませながら床のシミとなっていた。

「……っ！！！」

黒い甲羅はひしゃげ、おしりから体液を飛び散らせて中身が薄く広がっている。

由実はそれを一瞥すらせず、次の花に手を伸ばした。

「……大丈夫ですか？」

由実の声で、優斗ははっと顔を上げた。

彼女が、不思議そうに首を傾げている。

大きな瞳が、優斗の顔と、彼が何度も視線を落としていた自分の足元を交互に見ている。

「どうかされましたか？ やたらと下の方ばかり見られてるみたいですけど」

優斗の背中を、冷たい汗が伝った。

「い、いえ……その……」

言葉が、喉で絡まる。

勃起したままの下半身を隠すように、さらに鞆を抱きしめる。

由実は自然と自分の足元を覗き込んだ。

「私の足元、なにかありました？」

その問いが、優斗の最後の理性を揺さぶった。

ごまかしきれない。

むしろ、この無自覚な態度の前では、嘘をつく方が残酷に思えた。

「……実は、丁度床を見ていたら、小さい虫が歩いている」

声が、震える。

「それを、今、無意識だと思いますが、足で踏まれてたので……つい、目で追っちゃってました」

由実は、一瞬だけ目を丸くした。

それから、あっけらかんと笑った。

「え、なんだ、そんなことですか～。何かあったかと思ってびっくりしましたよ(笑)」

彼女は軽く笑いながら、自らが踏み潰した残骸を見下ろすことすらしない。

「お花があるとどうしても虫が集まってきちゃうんですよねー。仕方ないですよ、本当」

その言葉には、罪悪感の欠片もなかった。

ただの日常。花屋として当然の出来事。潰した甲虫のことなど、全く気にしていないような、明るい声。

優斗は、その笑顔を正面から見つめながら、自分が完全に堕ちていくのを感じていた。

(……何とも思っていない)

(あんなに無残に潰したのに……笑顔のまま)

股間の疼きが、痛いほど脈打つ。自己嫌悪が胸を刺すのに、興奮はそれを上回って溢れ出す。

由実の無自覚さ、気にしていない態度、可愛い顔のまま、何の罪もない小さな虫の命を踏

み潰してしまう残酷さ——

そのすべてが、優斗の欲望の中心を、容赦なく貫いていた。

「虫くらい、踏んじゃうことなんて日常茶飯事ですから」

由実はそう言って、また剪定バサミを手を取った。

「そうなんですね……」

優斗は、ただ頷くことしかできなかった。

足元に残された、ぺちゃんこになった黒い残骸。

その横で、その元凶となった由実の足が、何事もなかったように静かに立っている。

優斗の中で、由実の無自覚さへの執着が、決定的なものになった瞬間だった。

第3章 パンプスを譲ってください

あんな光景を見せられ、優斗の股間は、ズボンの生地の下で熱を帯びたまま、収まる気配がなかった。

由実は何事もなかったように剪定を続け、時折優斗の方を見て微笑んでいる。

その無防備さが、かえって優斗の理性を削り取っていく。

(……今、あんなに無残に潰したのに)

(笑顔のまま、何も気にしていない)

優斗は、鞆を前に抱えたまま、慎重に口を開いた。

「……虫とか、平気なんですか？」

由実は剪定バサミを置き、軽く首を傾げた。

「え？はい。やっぱり職業柄どうしても虫はよ

く出るの。害虫駆除とかもしないといけないし、わりと平気ですよ？」

その返事は、あっさりとしていて、迷いがなかった。

優斗の喉が、小さく鳴る。

「害虫駆除って……今みたいに、足で踏んだりするんですか……？」

由実は「うん」と小さく頷き、赤いパンプスのつま先を軽く動かした。

「そうですね。踏むときも有るし、スプレーとか使うときも有りますよー。大きいのか

動くの速いのはスプレーの方が楽ですけど、青虫とか、足元にいる小さいのは、面倒なので踏んじゃうことが多いです」

(……踏んじゃう)

(踏んじゃう……)

優斗の頭の中が、熱で白くなりかけた。

可愛い顔で、こんなことを平然と言っている。

「そう、なんですね……」

声が、わずかに震えた。

「こんな可愛い方が、虫を平気で踏んじゃうの……なんか、意外です」

由実は目を丸くして、それからくすぐったそうに笑った。

「えー、そうですか？ あたしそういうの全然気にしないですよ。もしかして、引いちゃいました…？」

その問いが、優斗の胸に直接刺さった。

引いた？ とんでもない。

むしろ、逆だ。

「いえいえ……引くどころか、ちょっと良い
なって……」

口が、勝手に動いてしまった。

由実の手が、作業台の上で止まった。

「え？ 虫を踏むのが、良いんですか？」

優斗は、自分の耳まで熱くなるのを感じた。
眼鏡の奥で視界が少し揺れる。

もう後戻りできないところまで、言葉が出て
しまっている。

「え、いや……はい……」

息を吸い、吐き、そして続けた。

「可愛い女性が、足でそういうことするの…
…なんか、ドキッとするというか……」

沈黙が、一瞬だけ落ちた。

由実は、優斗の顔をじっと見ていた。

大きな瞳が、ゆっくりと細くなる。驚いている様子はある。

けれど、嫌悪や拒絶の色は浮かんでいなかった。

むしろ、少し面白がるような、軽く首を傾げる仕草だった。

「あれ、もしかして……そういう趣味の方ですか？(笑)」

声のトーンは、変わらない。明るく、さっぱりしている。

「変わってますねー。私はあんまそういうの気にしないですけど、世の中色んな趣味の人いますよねー」

由実はそう言って、ふふ、と小さく笑った。

優斗は、その態度に、強く胸を衝かれた。

(……引かれなかったのか……?)

(むしろ、軽く受け入れられてる…?)

うっかりとはいえ、性癖を、初めて他人に——しかも本人に——開示してしまった。

勢いで出てしまった本音。本来なら、顔から火が出るほど恥ずかしいはずなのに、由実の反応は予想外に穏やかだった。

拒絶されない。気味悪がられない。ただ「変わってるね」と、軽く受け流される。

その寛容さが、優斗の中で小さな期待を育て始めていた。

（もしかして……由実さんって、こういうのにも寛容な人なのかもしれない）

由実は、すでに次の花に手を伸ばしている。
赤いパンプスのつま先が、床の上で小さく動く。

さっき甲虫を潰した足が、今も何の躊躇もなくそこにある。

優斗は、自分の心臓が早く打っているのを感じていた。

初めて性癖を打ち明けたこと。

そして、それが拒絶されなかったこと。

優斗は、鞆を強く握りしめながら、次の言葉を探していた。

このまま終わるわけにはいかない。

もっと——。

彼女の足に、近づきたい。

由実の寛容な態度が、優斗の背中を静かに押した。

（もう一步だけ、踏み込んでみよう……）

「あの……気持ち悪かったら全然答えてもら

わなくて大丈夫なんですけど」

声が、わずかに上ずる。

「今履かれてる靴って……どれくらい履かれてるんですか……？」

由実は自分の足元を見下ろし、足を軽く動かした。

「え、この靴は仕事用なので、多分二年くらいですかね？ どうしてですか？」

不思議そうな顔で聞き返される。
優斗は視線を逸らし、適当にごまかした。

「いや……ちょっと気になっただけです」

会話は、自然と世間話の流れに戻っていく。

花の仕入れの話、最近の気温の話。由実は相変わらずさっぱりした口調で話し続けた。

「そういえば、この靴も結構履いてるし、匂いとかも気になってきたのでそろそろ買い替えたいんですよね……」

……っ！

由実のその一言で、優斗の股間が、びくりと跳ねた。

「実は私、雇われ店長で給料も安くて大変なんですよね…。あ、ごめんなさい、お客さんにこんな愚痴言っちゃって（笑）」

由実 は照れたように笑って手を振る。

だが、優斗の耳には「匂いとかも気になってきた」という部分だけが、異常なほど大きく残っていた。

(……匂い)

(由実さん自身が、パンプスの匂いを気にしてる……)

頭の中が、熱で霞む。ズボンの中で、硬くなったものが痛いほど主張を始める。

もう、我慢できなかった。

「あの……」

優斗は、鞆を強く握りしめた。

「良かったら……そのパンプス、買い取らせてもらえませんか……？ それなりのお代はお支払いしますので」

由実の手が、止まった。

「え……今履いてる、この靴ですか……？
こんなボロボロの靴をですか……？」

目を丸くして聞き返される。優斗は俯き加減のまま、小さく頷いた。

由実は、前の会話の流れから、何となく事情を察したようだった。

深くは探らず、ただ少し考え込むように唇を噛む。

それから、意外なほどあっさりと口を開いた。

「何に使うのかはちょっと気になりますが……ま、お金になるなら、こんな汚い靴でよければ。丁度新しい靴も買ったかったので、良いですよ」

まさかの言葉だった。

優斗は、自分の心臓が喉まで上がってきそう

になるを感じた。

興奮を必死に抑えながら、深く頭を下げる。

「え……良いんですか……？」

「あ、ありがとうございます……本当に…
…」

「いえいえ一、えっと、今すぐだとさすがに
仕事があるので……十七時にもう一度来ても
らうこと、可能ですか？」

「はい。もちろんです。では十七時に、また来
ます」

念のため、連絡先を交換することになった。

由実のスマホに、優斗の本名「高橋優斗」が表示される。

「あ……優斗、さん、っていうんですね。初めてちゃんと名前、知りました」

由実がそう言って微笑む。

優斗は、名前を知られたことの嬉しさと、これから起きることへの期待で、頭がくらくらした。

一旦店を出る。

外の空気が、妙に生々しく感じられた。

まさかの急展開に、心臓の鼓動が早まる。

喜びと興奮で胸がいっぱいのまま、約束の時間まで一時間ほど、近くの公園のベンチで時間を潰した。

時計を何度も確認する。頭の中では、由実のパンプスの中の匂いばかりが、ぐるぐると回っていた。

十七時ちょうど。

店の前に戻ると、すでにのれんは下ろされ、閉店後の静けさが漂っていた。

由実が、入り口の近くで待っている。

足元はサンダルに履き替えられ、脱いだ赤いパンプスが、小さな紙袋に入れられていた。

「すみません、お待たせしちゃって」

「いえいえ……こちらこそ、変なお願いなのに聞いてもらって、本当にありがとうございます」

優斗は、用意していた二万円を差し出した。

由実は目を見開き、札束を見て驚いた顔をする。

「え……こんなに良いんですか？　こんなボロボロの靴に……？」

「はい。自分にとっては、むしろ安い位なので……」

由実は少し躊躇したあと、紙袋を優斗に渡し

た。

その手つきが、ほんのわずかに恥ずかしそうだった。

「えっと……私、結構そういう趣味とかには寛容な方なので、何に使うかとかはあまり深くは聞きませんが……」

言葉を選びながら、由実は視線を少し逸らす。

「結構履いてた靴なので……恥ずかしいので、その、匂いとかはあまり嗅がないでくださいね……？」

その恥ずかしそうな表情と、改めて由実の口から直接聞かされた「匂い」という言葉。

優斗の興奮は、爆発寸前まで高まった。

紙袋の中で、まだ体温の残る赤いパンプスが、重みを持って手元にある。

ただの顔見知りの客と店員では、もうなかった。

明確に秘密を共有した、深い関係への第一歩が、今、確かに踏み出されたのだった。

* * *

はやる気持ちを抑えきれず、優斗は足早に帰路に就く。

鞆の中で、紙袋が軽く揺れるたびに、胸の奥が熱く跳ねる。

股間はすでに痛いくらいにパンパンに膨らみ、歩くたびにズボンの生地が擦れて疼いた。

(……夢なんじゃないか)

(ついに、あの由実さんのパンプスが……嗅げる……！)

家に着くなり、靴を脱ぎ捨て寝室へ飛び込んだ。

ドアを閉め、震える手で紙袋を開ける。

中から現れたのは、まだほんのりと体温を残した、あの赤いペタンコパンプスだった。

優斗は、それを両手でそっと持ち上げた。

サイズは二十三センチくらいだろうか。

女性らしい、小さくて可愛いサイズ。

外側の革は二年もの使用で柔らかくなり、履き皺が細かく走っている。

つま先の部分には薄い汚れと、小さな擦り傷。

ヒールの接地面は擦り減り、全体に「仕事で毎日履き込みました」という生活感が染み付いていた。

(……由実さんが、毎日これを履いて……)

息が、熱くなる。

次に、パンプスを裏返した。

靴底を見た瞬間、優斗は思わず声を漏らした。

「……こんなに……」

ソールには、しっかりと踏みしめられて張り付いた、色とりどりの花びらや茎の残骸が残っていた。

白いつぼみの破片、薄いピンクの花びら、緑の茎の断片。

雨の日に見たものよりも、さらに生々しく、靴の裏にぴったりと密着している。

可愛い由実が、何も気にも留めず踏み、靴底に張り付けて汚した花びらたち。

(……やばい……！やばすぎる……)

(これ、全部、由実さんの足で……)

左足のソールに、目が釘付けになった。

中央付近に、黒いシミがある。

よく見ると、虫の足や甲羅が潰れたような残骸が、靴底にへばりついていていた。

(……これ)

(さっき、踏まれた虫だ……)

優斗の目の前で、由実が笑顔のまま踏み潰したゴミムシの残骸だった。

黒い甲羅の欠片が、ソールの裏にへばりつき、干からびかけている。

「もう……我慢できない……」

声が、掠れた。

股間は、もう限界が近かった。

ズボンの中で、硬くなったものが脈打っている。

それでも、優斗は次の確認を止められなかった。

パンプスを再度裏返し、インソールを観察する。

見た瞬間、思わず声が漏れる。

「ああ……もう……」

かわいらしい外見とは真逆に、薄ベージュで

あったろう中敷きは、左右ともしっかりと足の形に薄茶色に汚れていた。

特に踵から土踏まず、そしてつま先にかけて、足の形に沿って茶色が濃く沈んでいる。

つま先のあたりは、指の形に凹み、汗と皮脂が染み込んだ跡がくっきりと残っていた。

(……足の形が、そのまま……)

(由実さんの、足指の形が……)

もう、無理だった。

優斗は、右足のパンプスを両手で抱え込み、

息を止めて顔に引き寄せた。

鼻先を中敷きに押し付け。

ゆっくりと鼻から息を吸った——。

【この先の展開】

● ついに手に入れた憧れの由実の脱ぎたてパンプス。

ソールに張り付いた花びらと虫の残骸、中敷きに濃く刻まれた足形を前に理性が崩壊する優斗。

鼻を深く埋め、二年間履き込まれたパンプスに染み付いた濃厚な足臭を肺いっぱい吸い込みながら、何度も果てていく。

● パンプスの匂いだけでは足りなくなった優斗は、拒否される事を前提に由実に直接足の匂いを嗅がせてほしいと懇願する。

由実は意外にも寛容に応じ、閉店後の店内で仕事終わりの蒸れたつま先や指の間を直接嗅がせてもらえる関係に。

●さらに、由実には赤いパンプスを履いてもらい、一日デートしてもらえることに。

無邪気に歩きながら道端に咲くたんぽぽや小さな虫を無意識に踏みながら歩く彼女の足元を見つめ、優斗の興奮は限界に。

ホテルへ移動した二人は、脱ぎたてのパンプスと蒸れきった素足を使った濃密なプレイへ……。

ずっと遠目で見つめていた憧れの花屋の店員の足を嗅ぎ、踏まれ、イカされ続ける――。

由実の無自覚な残酷さと、徐々に積極的になっていく態度が、優斗の欲望をどこまでも深めていく…。

目が離せない後半はフェチ描写にこだわった
フル挿絵付きの製品版でどうぞ！！